

【 復活讃詞 第1調 】

きゆ せ いしゅよ、イウデヤのひとはかをふうじて、へいそつ
 救 世 主 人 墓 封 兵 卒
 なんぢのいさぎよきみをまもるとき、なんぢはみっかめにふくかつ
 爾 潔 身 守 時 爾 三 日 目 復 活
 して、せかいにいのちをたまえり。ゆえにてんぐんはなんぢ
 世 界 生 命 賜 え り 故 天 軍 爾
 いのちをほどこすのしゅによんでい う、ハリストスや、こうえいは
 生 命 施 主 呼 日 う、ハリスト ス や、こ う え い は
 なんぢのふくかつにきし、こうえいはなんぢのくににきす、
 爾 復 活 につ き し、こ う え い は なん ぢ の く に に き す、
 ひとりひとをいつくしむのしゅや、こうえいはなんぢのおもんばかり
 獨 人 慈 し む の し ゅ や、こ う え い は なん ぢ の お も ん ぱ か り
 にきす。

【 日本の使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよ
 光 榮 は 父 子 聖 神 に き す、い ま も い つ も よ よ
 に、アミン。
 しととひとしくどうざなるものちゅうじつにしてしんちなる
 使 徒 等 同 座 者 忠 實 に し て し ん ち な る
 ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえられたるふえ、ハリストスの
 役 者 聖 神 に え ら れ た る ふ え、ハ リ ス ト ス の

あ い に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う し ょ う し ゃ 、
 愛 満 器 我 國 光 照 者 、

あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、
 亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲

お よ び ぜ ん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い さ ん しゃ に い の り
 及 全 世 界 爲 め に 、 生 命 賜 聖 三 者 祈

た ま え 。
 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と

なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを興え、 罪を行う者を棄てずして、 其救の爲に痛悔

を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を

以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と

を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世

に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうぎ、せいなるじょうせいのものよ、
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生者、
 われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうぎ、
 我等をあわれめよ。せいなる
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなる
 聖なる常生者、我等をあわれめよ。せいなる
 かみ、せいなるゆうぎ、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 神、聖なる勇毅、聖なる常生者、我等を
 あわれめよ。こうえいはちちとことせいしんにきす、いまでも
 憐れめよ。光榮は父と子聖神に歸す、今も
 いつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのものよ、われらを
 何時も世に、アミン。聖なる常生者、我等を
 あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうぎ、せいなる
 憐れめよ。聖なる神、聖なる勇毅、せいなる
 じょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐れを我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 われら なんぢを たのむ が ごとく、 な んぢの あわれ みを
 主 我 等 爾 頼 の む が 如 く、 爾 ぢの あわれ みを

われら に た れ た ま え 。
 我 等 垂 給

誦經) 義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、

しゅ よ 、 われら なんぢを たのむ が ごとく、 な んぢの あわれ みを
 主 我 等 爾 頼 の む が 如 く、 爾 ぢの あわれ みを

われら に た れ た ま え 。
 我 等 垂 給

誦經) 主よ、我等爾を頼むが如く、

な んぢの あわれ みを われら に た れ た ま え 。
 爾 ぢの あわれ みを 我 等 垂 給

【 使徒經 (アポストロス) コリント後書9章6節~11節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、乏しく稼く者は乏しく穡り、豊に稼く者は豊に穡らん。人各其心の

欲する所に随い、憂に由るに非ず、強いて爲すに非ずして施すべし、蓋神は樂

みて與うる者を愛す。且神は爾等を諸恩に富ましめんことを能す、爾等常に凡の

事に於て足らざるなくして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり、録されしが如し、云く、

彼は散じて、貧者に施せり、其義は世に存すと。播く者に種を與え、食の爲に餅

を備うる者は、願わくは爾等が播く種を備え且殖し、又爾等の義の實を益さんことを、

爾等が凡の事に富むに由りて、博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に奉る

かんしゃ な
感謝を作す。

(比較用 口語訳)

少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりでである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我 爾の名に歌わん、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ 行 いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が 靈 と體との光 照なり、我等 爾 と 爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 15 章 21~28 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
 爾神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時イイス、ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖に在るを見たり、漁
 者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れ
 んことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り竟りて、シモンに謂えり、深き處に移り、
 網を下して漁せよ。シモン彼に對えて曰えり、夫子よ、我等終夜勞して、得る所な
 かりき、然れども爾の言に依りて、我網を下さん。既に之を行いて、魚を圍めるこ
 と甚多く、網裂くるに至れり。乃他の舟に在る侶を招きて、來り助けしむるに、彼
 等來りて、魚二の舟に切ちて、幾ど沈まんとせり。シモンペトル之を見て、イイスの膝
 下に伏して曰えり、主よ、我を離れよ、我罪人なればなり。蓋彼及び彼と偕に在りし
 ものは、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、シモンの侶たりしゼヴェデイの子イアコフ及
 びイオアンも亦然り。イイスシモンに謂えり、懼るる勿れ、今より後爾人を漁らん。
 彼等舟を岸に曳き、一切を捨てて、彼に従えり。

(比較用 口語訳)

イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。話がすすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびたしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびたしいのに驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 す。

(金口イオアンの聖体礼儀 2 へ)